



ルーマニアで社会主義者を胴上げする

2010, 丹羽良徳

Toss Socialists in the air in Romania

2010, Yoshinori Niwa

社会介入行為芸術

「ルーマニアで社会主義者を胴上げする」

丹羽良徳, 2010年

Intervention Art Project "Toss socialists in the air in Romania" Yoshinori Niwa, 2010

我々は自己矛盾しなければ、自分のことが分からないのかもしれない - 丹羽良徳



[国軍と対峙する抗議デモ(ブカレスト,1989年)]

プロジェクト内容

東欧ルーマニアの首都ブカレストのコンテンポラリーアートセンターPAVILION UNICREDITにて、市民参加型のパフォーマンスプロジェクト「社会主義者の胴上げ」を実施します。89年のルーマニア革命から約20年後のブカレストを舞台に、旧ルーマニア共産党本部（現在は上院議場）屋上にて、旧共産党の後継政党議員を一般市民の手で胴上げします。負の歴史と考えられることの多い共産主義（者）が祝福されるという、錯綜した状況をつくりだすことで、社会主義思想に対する嫌悪や哀愁などの個人的感情・記憶を召喚することを試みます。また、後継政党議員及び革命経験の有無にかかわらずあらゆる世代の人々に参加要請の交渉を行うこと、参加者を対象に綿密な取材を行うことを通して、歴史的事実の内部へ足を踏み入れます。参加者の言葉や表情、しぐさを映像や資料としてまとめ、パフォーマンスとともに展示することで、個人感情が幾重にも重なり合ったルーマニアの歴史を見つめ直し、現代の資本主義への逆説的な問いを浮かび上がらせます。また、このプロジェクトの本質的な意義は遠い国の話にとどまるものではありません。ここから、我々日本の歴史を考えてみることもできるでしょう。私たち日本人は過去の

歴史の中で、社会主義の経験も市民革命の経験ももちま  
せんでしたが、このような出来事は世界のあらゆる国や地域  
で幾度も繰り返されてきただけでなく、今現在も続いてい  
ます。世界の実社会にはこのような政治闘争の歴史が生み  
出した惨劇と人々の記憶が確かに残っているのです。私は  
アーティストとして社会主義をアピールするのではあり  
ません。目に見えない今日の社会的な状況と過去の歴史を  
結び付け、現実社会に小さな風穴をあけることで、現代社  
会を捉え直し、また人類の生の営みを勇気づけようとして  
います。

### 社会介入行為とは

このプロジェクトは「行為」によって社会との新たな接点を  
作り出す現代芸術作品です。特定の共同体や社会との関わ  
りのなかに、ユーモアに満ちた、ときに無意味で不条理な  
アイデアを持ち込むことによって、私たちの暮らす現実世  
界に対する新たな視点を獲得していきます。社会の関係性  
の編み目に介入し、市民などから様々な反応を得ることで  
成立する芸術です。

### 胴上げ

偉業を達成した者、祝福すべきことがあった者を祝うため  
に、複数の人間の手で当事者を数度空中に放り投げる行為。  
胴上げは主に日本の伝統的風習と考えられることが多い  
が、近年欧州のサッカーチームが行うこともある。また  
1927年、大西洋横断飛行に挑戦したアメリカ人女性がフ  
ランスのパリで胴上げされた記録も残っている。

### ルーマニア革命 (1989年) Wikipedia より転載

1989年、東ヨーロッパ各国の共産党政権が相次いで崩壊  
した東欧革命において唯一、武力により共産党政権の転覆  
が行われた。きっかけは大統領のニコラエ・チャウシェス  
クが命じた民主化デモの武力鎮圧に反対した国防相のワ  
シーリ・ミリヤが突然死去（銃撃による死亡）したことか  
ら、国軍がチャウシェスクに反旗を翻して民主化勢力を援  
護し、治安部隊との武力衝突に陥った。革命勢力は1週間  
で全土を制圧しチャウシェスクを拘束、処刑し非共産党政  
権を樹立した。

革命後、他の東欧諸国では、自由選挙の下で多かれ少なか

れ旧共産党が議席を獲得した。しかし、ルーマニアでは革  
命後に共産党が消滅し非合法化された（後に撤回）。ルー  
マニア共産党関係者は、救国戦線に参加して政治生命を保  
った。地下に潜伏中ではあるが、ルーマニア社会主義労働  
者党を名乗る勢力がチャウシェスク体制の復活を目指し  
ている。

1999年12月、革命10周年に当たって行なわれた世論  
調査によると6割を超えるルーマニア国民が「チャウシェ  
スク政権の方が現在よりも生活が楽だった」と答え、同  
国政府を驚かせた。市場経済の停滞と失業者の増加により  
生活が悪化し、国民の不満が高まる中で各地の工場や炭坑  
ではストライキが頻発。その参加者の中には、チャウシェ  
スクの肖像写真とともに「チャウシェスク、私たちはあな  
たが恋しい」といったプラカードを掲げる人も少なくない  
という。惨殺されるほど嫌われ恐れられた独裁者が、少な  
くとも最低限度の生活を保障していたことで死後改めて  
評価されるという皮肉な展開となった。

しかし一方でやはり共産・社会主義体制は過去の物と言う  
観点もあり、「我々はとりあえず自由を手に入れた。次は  
幸福を手にする番だ」というスローガンも見受けられるな  
ど評価は定まっていないのが実情である。また、いまだに  
政府中枢には現在も旧共産党系の人物が残り、1000人も  
の犠牲者を出した革命時の加害者の追及の不徹底など、国  
民の間では、まだ革命は終わっていないとの声も多く、旧  
東欧諸国の中でユーゴスラビアと並び、「革命の後遺症」  
をかかえている。

### プロジェクト概要

事業名：ルーマニアにおける社会介入行為プロジェクト  
「ルーマニアで社会主義者を胴上げする」

参加プログラム：Utopia of Exotic (2010年12月9日  
～2011年2月13日)

キュレーター：Andrei Craciun (b. 1988)

滞在制作：2010年11月30日～2010年12月21日

主催：丹羽良徳

助成：朝日新聞文化財団（申請中）

共催：PAVILION and BUCHAREST BIENNALE

会場：PAVILION UNICREDIT

現地コーディネーター：Razvan Ion, Eugen Radescu

and Andrei Craciun

会場所在地：Pavilion Unicredit (Sos. Nicolae Titulescu  
nr. 1 (Piata Victoriei), Bucuresti)

URL : <http://www.pavilionunicredit.org/>

### プロジェクトチーム

テクニカルアシスタント：阪中隆文、中堀徹

広報協力：根上陽子

デザイン協力：ゴロウ

### 制作スケジュール (予定)

2010年11月30日 出国

2010年12月1日-12月8日 現地リサーチと現地スタッフとの打ち合わせ

2010年12月9-10日 プロジェクト実施

2010年12月11-20日 ドキュメント制作

2010年12月21日帰国

2011年 ドキュメントカタログ作成

### 共催団体/会場

Pavilion / パビリオン

パビリオンはルーマニアの首都ブカレストにおいて現代美術および文化および政治における同名のジャーナル紙を発行。幅広く横断的な内容のエッセイを中心にインタビュー、アーティストのプロジェクトを特集し、刺激的な現代文化そして社会的政治的マガジンとして活動している。単に現在起こっている現象を記述するだけでなく社会、政治、文化に介入したエッセイなども。毎号において近年重要であるテーマを取り上げながら、実績のあるものと若手の新進気鋭のアーティスト、ライター、評論家などを同じように掲載。また、パビリオンは芸術雑誌の出版業務と同時に、ルーマニアにおける唯一の国際ビエンナーレであるブカレストビエンナーレを主催。また2009年よりUnicredit 銀行の協力を得て、新たにアートセンター Pavilion Unicredit を設立運営し、ルーマニアにおける現代美術の研究および普及に尽力する。近年は東欧だけでなく、アメリカや西ヨーロッパのアートセンターとの協力事業も盛んに企画している。

Pavilion

[www.pavilionmagazine.org/](http://www.pavilionmagazine.org/)

Pavilion Unicredit

<http://www.pavilionunicredit.org/>

Bucharest Biennale

<http://www.bucharestbiennale.org/>

### プロジェクト支援者募集

このプロジェクトは一部自己負担金にて実施しております。そのためルーマニアでのプロジェクトを円滑に進めるため、以下のとおり支援者を募集しています。※プロジェクト詳細は、本紙及びウェブサイトをご覧いただき、ご興味いただければ、是非プロジェクトへ支援をお願いいたします。

#### [支援内容]

■目的：ルーマニアにおけるプロジェクト作品の実施の為  
■用途：渡航費用、作品制作費（取材費・現地交通費・通信費含む）

■支援金額：（個人/団体）一口1000円から

■支払方法：銀行振込（新生銀行）もしくはPaypal

■お振込口座：

新生銀行 新宿支店 普通 0393268 ニワヨシノリ

■特典：

支援頂いた方にはクレジットにお名前を記載の上、プロジェクト実施後、活動報告書をお送りいたします。

また、帰国後の報告会へのご招待、今後のプロジェクトについての最新情報等をご案内します。

※ご支援金の内訳についても、実施後、責任をもってご報告させていただきます。

■申込方法：

メール・電話にて支援ご希望の旨をお伝えいただき、以下問い合わせ先まで氏名・連絡先・支援金額をご連絡ください。担当者よりご支援内容について確認させていただきます。その他ご質問等、いつでもお問い合わせください。

■問い合わせ先：

e-mail : [niwa.romania@gmail.com](mailto:niwa.romania@gmail.com)

tel : 090-6947-9093 (支援に関すること)

tel : 090-4187-0362 (企画に関すること)



## アーティスト

丹羽良徳 にわよしのり

1982年愛知県生まれ。2005年、多摩美術大学造形表現学部映像演劇学科卒。路上を活動の拠点とし、国内外で、コミュニティーベースのプロジェクトや、社会への介入を試みるパフォーマンスを発表。主な作品に鳥インフルエンザが流行した時期に鶏にイラク戦争や身の回り様々な質問をしにいく「ヤンキー養鶏場」、東ベルリンの水たまりを西ベルリンの水たまりに移しかえる「水たまりAを水たまりBに移しかえる」など。主な個展に2010年「複合回路 vol.3 アクティヴィズムの詩学」ギャラリーαM、「解決策なし、それでも大乱闘」Ai Kowada Gallery。参加アーティストインレジデンスに2005年、VENT Residency Programme(オックスフォード、イギリス)、2010年、HIAP-Helsinki International Artist-in-residency Programme(ヘルシンキ、フィンランド)など。  
<http://www.niwa-staff.org/>



ヘルシンキにて、2010年



### 泥棒と文通する

パフォーマンス, 2010

ヘルシンキの複数の銀行ビルの壁に 営業時間終了後の夜間だけ 「泥棒のみなさま、今が盗みに入る時です」というメッセージを大型ライトプロジェクターで投影する。反社会的人物である泥棒とコミュニケーション取ろうと試みることで、存在するであろう社会の中の見えない他者との交信を想像させつつ、そのサインを見た人々は権威や資本主義社会の抵抗行為としてのあらゆるレベルの想像上の銀行強盗や盗みを想像させる。

Produced in a residency at HIAP production residency programme, Helsinki  
Supported by HIAP



### 熊が熊に会いに動物園に行く

パフォーマンス, 2010

熊の着ぐるみを着たまま四足歩行で、上野動物園の熊に会いに行く。明らかに着ぐるみだと分かるのだが、途中で会う人々はその行為を応援するかのように振る舞ってくれる。理解不能な目的を持った行為を動物というファクターを通して実演してみせる事で、現実の人間社会ではあり得ない他者との反応を獲得する。その反応から私達を取り巻く身近な人間関係の在り方を問い直す。



### 結婚を決意できない友人の為に深夜2時街灯の下で結婚式をする

ラムダプリント, 2009

長年お付き合いをしていた友人が結婚に踏み切れずにいる時に、ぼくがウェディングドレスとタキシードを着せて写真を撮ってあげるよということから始まった企画。ぼくにはもう彼らにかけ言葉が見当たらないという状況であったために、すくなくならず彼らとどのように関わっていけるかと問いたです作品となった。実際この作品が完成した後で婚約されたそうです。 .





### 自宅のゴミをサンフランシスコのゴミ捨て場に捨てに行く

パフォーマンス, 2006

日本のゴミをアメリカへ。僕の東京の自宅のゴミを飛行機に乗ってそのまま、サンフランシスコのゴミ処理場まで持ち込んで処理してもらおう。地域的な問題を携えたまま国境を飛び越えることで感じられる違和感を用いながら、政治的や社会システムの類似点の多い日本とアメリカ間でゴミの交換をすることによって、私達が日々作り出しているゴミがどこから生まれて来てどこへ行くのか、という問いだてをする。



### 多摩美術大学をびかびかびかにする

パフォーマンス, 2008

およそ 30 分間にわたり多摩美術大学校舎内のすべての電灯を 5 秒間隔で点滅させる。約 200 名の学生ボランティアとの協力のもとで実現した。教室・研究室・廊下・街路灯・野外時計などほぼ全域の明りを一時的に点滅させ。大勢のボランティアスタッフとの共同体験を通して、一瞬にして消え去る“点滅現象”をかけがえのない生の悦びに変換する試み。最終的には、5 秒単位を無視したオリジナリティー溢れる学生の教室点滅が見られた。他者との共有や共同幻想といったことをテーマに実施されたプロジェクト。



### 水たまり A を水たまり B に移しかえる

パフォーマンス, 2004

かつて存在したベルリンの壁があった場所で水たまりを別の水たまりへと口移しで雨水を移しかえる。日本人である私が冷戦やベルリンの壁にいかに関わり合いができるのかと問うた時に、ぼくにはもうこれ以上のことができないのではないかと、東ベルリンの水たまりを口移しで移動させた。越えることのできない障壁に対するささいな反抗とその行為によって浮かび上がるベルリンの壁という歴史的記憶に向かう。絶えず衝突をしてきた東西冷戦の問題に対して、日本人としてどのように関わるのかと切実に問う。